

どんなに目を凝らしたところで、都会の夜空に瞬く星を見つけることはできない。  
またた

地上の星々——密集するビルから漏れ出る明かりや、道のあちらこちらでその存在を主張している電飾看板。そして、その街自体を照らす外灯が、真っ黒い空をも明るくし、星の煌きを覆い隠してしまうからだ。

特に、私が今いるここは、真っ白いLEDライトに加え、ピンク、パープル、グリーンイエローといった色のネオンサインがそこかしこに取りつけられていて、それがプールの水面にキラキラと反射しているものだから、余計に。

プールサイドには、どこぞのリゾートにでも置いてありそうなビーチベッドにパラソルがずらりと並び。水面には、二枚貝やフラミンゴなんかをモチーフとした大型の浮き輪フロートが浮かび。

遊泳場に流れているのは、高揚感と開放感を促すアップテンポのEDM。ここは、某高級ホテルの屋上に設置された、現在プレオープン真っ只中にあるナイトプールだ。

ちょっと周りを見渡せば、派手めな水着に身を包んだ若いカップルや、数人で徒党を組んでいる女子グループが、ベッドに寝そべったり浮き輪に乗って写真を撮ったりと、みんなが思い思いにこの場を楽しんでいる様子が目に入る。

かくいう私も、白と緑のシックな色合いで纏められたバイカラー仕様のビキニを着てはいるのだけけれど。

私に連れはいない。それでいてベッドに横たわって疲れを癒すわけでもなく、プールに入って優雅に涼むわけでもなく。

ただただ、足だけを冷たい水に浸からせながら椅子に腰かけ、プールサイドに特設されているバーに入り浸り、カウンターの向こう側にいるマスターと話し込んでいた。

「……へへ！ マスター、弟さんがいらっしやるんですね」

私がピニャコラーダ片手にそう呟くと、マスターは様々なお酒がズラリと並べられたボトルラックを背に、にこりと微笑んだ。

「そう……結構年の離れた、やんちゃな弟が一人、ね。最近、ようやく手がかからなくなってきたところなんだ」

夏の夜にそうっと優しく吹き抜ける涼風のような、だからといって決して軽いというわけではなく、どっしりと落ち着いた深みのあるテノールに耳を

傾けながら、私はマスターの姿をこっそりと伺ってみた。

背は高く、黒を基調としたシックなデザインのアロハシャツから伸びる腕はすらりと長く。

琥珀色に輝く切れ長の目はとても穏やかなのに、ふとした瞬間に厳しく光ることがある。それはまるで、数多の戦場をくぐってきた老兵の目のように思えた。

スツと通った鼻梁と線の細い輪郭は、光の加減によっては若い女性と見紛うほど綺麗で。

けれど、毛先を遊ばせた短い銀髪と浅黒い肌のせいなのか、はたまたこのナイトプールという非日常的な空間のせいなのか、成人に仲間入りを果たしたばかりのパリピな青年に見えないこともない。

バーテンダーという職業柄、二十歳を超えていることはまず間違いないは

ずなんだけど……。

マスターは、なんだか正確な年齢が読み取れなかった。それこそ、ギリギリ十代だって言われても、私と同じ年ぐらいだって言われても、三十路を過ぎているんだと言われても、「そうなんだ」と妙に納得をしまいそうなほど、マスターはミステリアスな魅力に溢れていた。

そんな謎に満ちたマスターだけど、いい人なんだろうなっていうのだけはなんとなく伝わってくる。

だからこそ、私はこの特設バーから離れられないのだろう。

「ふふふっ、なんだか想像つくなあ……マスターがお兄ちゃんしてるところ。マスター、すっごく頼りがいありそうだもん」

私がぽつりと零した言葉は、ナイトプール全域を覆い尽くすEDMの重低音に紛れて、誰の耳にも入らないはずだったのに。

マスターは、そんな私の独り言をしつかり拾っていたらしい。

「……そういうお客さんも、”お姉さん”って感じだね」

不意打ちめいた語りかけに、私が思わず「え？」と間の抜けた返事をしながら頭を擡げると、マスターは少し困ったように顔を綻ばせた。

「こういう商売をやっているとね、一目見ただけでその人となりがわかるようになるものなんだ。お客さんは……間違ってもこんなところに来るようなことのない、とても真面目で面倒見の良さそうな人に見えるけど」

カウンターに両手をついたマスターが、くつと腰を屈めて、私の顔を下から覗き込む。揺れる銀色の髪の手から、シトラスの爽やかな香りがふわっと漂ってきて、私はほんの少しだけどきりと胸を高鳴らせてしまった。

「いままでずーっと、ひたむきに、誠実に、色んな人の世話を焼いて生きてきた……違う？」

マスターのその流麗な上目遣いにすべてを——このナイトプールにやって来た理由までも見透かされたような気がして、私は慌てて作り笑いを浮かべた。

「あ、あはははは……すごいですね。バーテンダーさんって、そんなことまでわかつちやうんだ……」

いやに乾く喉を潤したくて、残っていたカクテルを一気に流し込む。だけど、それが良くなかったみたい。

甘くて滑らかなお酒はすぐさま軽い酔いを引き起こして、私を饒舌にした。「——私、どういうわけか昔頃からそういう役回りが多いんですよ。小さい頃は、近所の子供たちの中でまとめ役みたいになってたし。学生るときだって、ずーっと学級委員長やって。仕事では、リーダーなんて任されちゃうし……」

ほう、と吐いた溜め息は、頬が火照っているせいなのか、心成しか熱を帯びている。

「それで、その仕事のことで仲間と揉めちゃって、喧嘩別れみたいになっちゃって……どうにもならなくて。もう嫌なことばかりで、とにかく誰かに慰めてほしくて、久々に彼氏に会いに行っただんですけど、そしたら……」  
私は、一呼吸置いてから、あまり公にしたくなかった出来事をおちまけた。  
「うっ、浮気現場に遭遇しちゃったんです……！　それも、思いつきりえっちしてるところに……！」

「……あらら」

マスターの抑揚のない合いの手が、私の愚痴に拍車をかける。

「確かに私も悪かったですよ？　仕事ばかりしてて、彼氏のことほったらかし気味で。でもでもそれでも、彼氏の家まで行って掃除とか洗濯とか、お



かずの作り置きとか色々やったりして……」

くどくどと喋り続けていたら、浮気していた彼氏と口論になったときの記憶が鮮明に蘇ってきて、自然と空<sup>から</sup>になったグラスを握る手に力が籠もった。

「なのに、別れ際に “なんか母親と付き合ってるみたいで嫌だった” とか、“それだけしつかりしてるんだからひとりで生きていけるデシヨ” とか、“セックスだって反応薄過ぎて、気持ち良くもなんともなかったし” とか、散々捨て台詞吐かれて……！」

ここまで赤裸々に語ったところで、少し冷静さが戻ってきたらしい。

私の目には、涙がじんわりと滲んでいた。

「……それで、“ただでさえ仕事が大変だったのに、どうしてこんなに辛い思いをしなきゃいけないんだ”、とか、“私にも非があったんだろうな” とか、色々考えてたら、もうワケがわからなくなっちゃって……そんなときに、こ

のナイトプールのプレオープンがあるって知って……」

「——え、なにになに？ それってつまり、浮気された腹いせにこのナイトプールまで来たってこと？」

マスターのものはまったく性質の異なる、軽薄な声を背後から浴びせかけられて、私は振り向きざまに頭を跳ね上げる。

そこには、大学生と思しき若い青年が、にやにやという音が聞こえてきそうなほどの笑みを称えて、私の傍らに立っていた。

「マスター、さっきのと同じスパークリングワインちょうだい！ あー、なんて名前だったっけ？ ほら、氷の入った、うっすらオレンジ色してるやつ！俺とこいつの二人分、お願いしまーす！」

続けざまに、その反対側から、やはり陽キャといった風貌の青年が、先ほどの暫定大学生を指差しつつ、カウンターの向こう側に立つマスターに注文

を入れた。どうやらこの二人は、連れ同士らしい。

「……OK。ちよつと、失礼するね」

マスターは私にそう断ってから、くるつと身を翻して酒棚を探り始めた。すると、まるでそのタイミングを見計らっていたかのように、青年たちが私の顔にぐつと近づいてきた。

「ね、オネーサン♡ヤリ目でここに来たんですよ？　だつたら俺たちが相手になるよ♡彼氏さんのことなんか忘れてさ、みんなでパァーっつと弾けちゃお♡」

「え、あの」

あまりにも直球な誘い文句に、私は反射的に身を引く。

けれど、引いた先ではもう一人の青年が待ち構えていて。

「俺たちもさー、ワンナイトしたくてこのプレオープンに参加してるんだけ

ど、なかなかこれっていう女の子が見つからなくて困ってたんだよねー♡でもよかったー♡オネーサンみたいなシコい美人が見つかった♡」

「ホントホント♡俺、おっぱいデカくてキレイなオネーサン大好き♡うは♡3Pなんて初めて♡めっちゃ興奮してきた♡ちんこ痛え……♡向こうにデカめのベッドあったからさ、そっちで楽しも♡」

押しの強い青年二人に両サイドからぐいぐいと迫られて、私はあつという間に逃げ場を失う。

そしてついに、青年の一人が私の肩にポンッと手を置いた、その瞬間——。「こら、その辺にしておけ」

マスターが、薄琥珀色のお酒が波々と注がれたグラスを二つ、青年たちの前にスツと差し出した。

「ここでのルールを忘れたわけじゃないだろう？ 女性を不快にさせるよう

な真似をするんじゃない。ほら、注文の品だよ。持っていきな」

「ちえ、怒られちゃったー、ざーんねん。オネーサン、気が変わったらいつでも声かけてね♡」

青年はマスターに窘められると、素直に私の肩から手を離してグラスを受け取った。

それに倣うようにして、もう一人の青年もグラスに手を伸ばす。

「あー、これこれ♡めっちゃ美味しかったやつ♡ありがとマスター！　じゃ、また今度お店に遊びに行くねー！　ばいばーい」

若者二人がスパークリングワインを片手に、いかにも上機嫌といった足取りでバーから立ち去っていく。

その背をぼーっと見送っていると、マスターの方からくつ、という、笑いを囁み殺すような声が聞こえてきた。

「……余計なお節介だったかな？」

苦笑を浮かべながら小首を傾ぐマスターを前にして、私はようやく助け舟を出されたのだということに気が付き、慌てて顔を横に振った。

「そ、そんなことはありませんっ、ありがとうございました……あの、お店つて……？」

己の至らなさが恥ずかしくて、私は取り繕うように話題を反らす。

「ん？ ああ。俺は普段、このホテルの近くにある小さなバーを経営しているてね。ここにはプレオープンの間だけ働きに来てるんだ。このホテルのオーナーとはちよつとした知り合いなんだけど……どうしてもって頼み込んでくるものだから、断り切れなくて」

マスターはそう語りながら、目線をフツと遠くに流した。

「俺の店は、このナイトプールとは正反対の……良く言えばレトロ調、悪く

言えば古臭いバーなんだ。まったく、オーナーはどうしてそんな店の人間をここに呼んだんだろうね？」

その優しい眼差しと語り口調に、私はやっぱりマスターの人柄を垣間見たような気がして、ほうつと安堵の溜め息を吐く。

でも同時に、胸にぽっかりと穴が開いたみたいで、頭がずっしりと重くなった。

——そうか、このプレオープンが終わったら、もうマスターとは会えなくなってしまうのか。

いやいや、マスターはこのホテルの近くにお店を構えていると言っていたのだから、その場所を教えてもらえばいいだけの話じゃないか。でも、そんなのあからさますぎるかな……？ 別に、マスターとどうにかなりたいてってわけじゃなくて、ただ、今生の別れみたいになるのは淋しいってだけであつ

て……なんて、こんなこと思ってる時点で、ドン引きされても仕方がないよ  
うな気がする……。

そうやって、取り留めのないことをぐるぐるぐる考えていたら、頭上  
から不思議な響きを伴った声が降り注いできた。

「……ねえ、本当によかったのかい？ さっきの二人、追いつちゃって」  
「え？」

まさかそんなことを訊かれるとは露にも思っていなかったから、驚いた弾  
みで頭が自然と跳ね上がった。

視線の先に待ち構えていたのは、マスターの理知的で鋭い、琥珀色の目。  
「だって、このナイトプールがどういうところなのか——……それを知った  
上でここに来たんだろう？」

マスターがそう言い放った、その瞬間——。



「あっ♡あっ♡ああん♡そこお……♡そこもってパコパコしてえ♡」  
後ろの方から、誰かに媚びるような女性の甘ったるい声がして、私の心臓がどつ……と鈍い音を立てて動き出した。

「うは♡でっけケツしてんなあ♡こんなトコに来るような女だもんな♡おら♡これが欲しかったんだろ♡俺のマグナム砲喰らいやがれ♡」  
「あん♡あん♡弱いトコばっかり突いちやだめえ♡ん♡ん♡こんな、こんなのすぐイッちゃう♡」

「ほら、もっと腰深く落として♡そうそう♡このえっろいまんこで、ちんぽの根元までずっぽし咥え込むようにね♡あ♡気持ちいい♡」

ぱん♡ぱん♡ぱん♡ぱん♡ぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅ♡ぱこぱこぱこ♡

会場に流れるEDMを掻き消すような男女のあられもない声に、水面が揺

れているのとはまったく異なる種類の水音が、方々ほうぼうから聞こえてくる。

振り返って確認するまでもない。

私の背後にあるプールやそのサイドで、幾人もの男女が互いを互いを貪り合うような、激しい情事に勤しんでいる――。

「――ここに来たのは、あの二人が言っていた通り……誰かとセックスして積もりに積もった憂さを晴らすため、そうだろうか？」

そう、マスターの指摘した通り。

だってここは、ホテルはホテルといっても、高級ラブホテルの屋上に作られた、様々な性的嗜好を持った男女が、セックスに耽ることを目的として集まる、いわゆるハプニングバーの様式に近いナイトプールなのだから……。

つまり、私も含め今ここにいる客たちはみんな、露出プレイや複数人での性交、一夜限りの情事を求めてこのナイトプールにやってきたということに

なる。

もちろん、メインの業態はあくまでもラブホテルだから、部屋を取ってそこで行為に没頭することも可能だけど……。

『オトナのアミューズメントパークを作りたい』というオーナーの何気ない一言で、このラブホテル並びにナイトプールが設立されたと聞いている。

今は季節が夏ということでこうしてナイトプールが展開されているけれど、季節折々に合わせてプールを一時封鎖し、それと入れ替えるような形でパーティ会場を作ってまたイベントを開催して……なんてことも企画しているみたい。まあ、そういうことができるかどうか確認するためのプレオープンでもあるのだろう。

本来ならなんらかの法に抵触してしまいそうなものだが、数年前の法改正とオーナーの類まれなる経営手腕で、このホテルは無事、合法的に建てられ

ることとなつたらしい。

その逸話を裏付けるように、ここでのルールはかなり徹底的に律されていた。

まず、規約を熟読の上で署名、更に身分証明書を提示、そのコピーを取られて、初めてこのホテルを利用することができる。

そしてなによりレディファースト……いくらセックスがしたくとも、基本的には女性側が“うん”と首を縦に振らない限り、絶対に手出し無用。

力任せに無理やり組み敷こうものなら、ナイトプールの各所に配置された、ライフガードをも兼ねた屈強な体付きをしている警備員たちがすぐさま駆けつけてきて、悪漢をホテルの外に放り出してくれる。私の場合はマスターが対処してくれたから出番はなかったし、言うまでもなくルールを破れば女性だつてご多分に漏れないが。

兎にも角にも、犯罪に手を染めることなく、安心して性行為を楽しめるのがこのホテルというわけだ。

だから私は、このホテルのプレオープンにやってきた。

「そう、です……その、なんだかもう、色々疲れちゃって。もうなんでもいから、とにかくめちゃくちやになっちゃいたくて、勢いでここまで来たんですけど……」

はつきり明言するのはやっぱり憚られて、言い淀んでしまったのだけだ……。

マスターは、そんな私の心まですっきり見透かしていたみたい。

「でも……怖気づいて尻込みしちゃったってわけだ。ふふっ、可愛いね」

その微笑は、決して私を小馬鹿にするようなものなんかじゃなくて。なんだか、小さい女の子を氣遣うような、すごく柔らかなもので。

この歳だもの。いつもだったら、子供扱いされたような気がして憤慨していただろうな。

でも今は、そのマスターの優しさが身に沁みちゃって……。

心は、決まった。

「あの……マスター。ここで働いている人をお誘いするのは、ルール違反ですか？」

私はマスターの顔には目もくれず、バーカウンターに名刺サイズぐらいのカードをそっ……と差し出す。

これは、ワンナイトをしたいという意思を示すためのカードだ。

セックスをしたいと思った相手に手渡し、受け取ってもらえたなら合意とみなされ、突っ返されたならば決裂。ちょうど、婚活パーティーなんかで見られるマッチングカードのようなものだ。

——そのカードを、マスターの長くて綺麗な指がスツと捲り上げる。

「……いいや。オーナーからはそういう風には聞かされてないけど……いいのかい？ 俺なんか貴女の相手をして」

「……マスターがいいんです」

私は俯いたまま、蚊の鳴くような声でそう呟くのが精一杯だった。

鬱屈とした気持ちをどうにかしたくてこのナイトプールに来てしまったけれど、やっぱり行きずりの人と身体を重ねるというのは、なかなかどうして、踏ん切りのつくことじゃない。

だけど、この人になら……このなんとも人の良さそうなマスターになら、身を委ねたい、って、そう思えた。

会場のBGMが、どこか遠い。若い男女が激しく睦み合う生々しい嬌声に釣られて、私の胸の鼓動もトク、トク、トク……と、どんどん速くなってい

く。

だ……ダメならダメでいいから、早くなにか言ってくれないと、心臓が破れちゃいそう……。

なんて思っていた、その矢先。

「いいよ」

想定してなかった方向からマスターの返事が聞こえてきて、私はゆっくりと顔を持ち上げる。

声のした方を見てみれば、いつの間にカウンターを回ってきたのやら、マスターが私のすぐ隣で、目と鼻の先で、優しくも妖艶な、眺めているだけであつたりとしてしまいそうな笑みを浮かべていた。

「お望み通り……いくらでも滅茶苦茶にしてあげる」

そう宣言するや否や、マスターは私の手を引きながら、空いている椅子に



スツと腰掛け、そして。

「ここにいるみんなに負けないぐらい、ね……」

マスターは、私を背後から抱きすくめたまま椅子を直角に回転させた。

——私のすぐ目の前で、妖しく輝くナイトプールの光景が、ありありと広がっている。

「ちゅっ、ちゅぱっ……♡んあっ……♡えあ♡ぢゅるっ、ぢゅるっ……♡」  
プールの水に腰まで漬かりながら、舌と舌を突き出し、熱心に絡み合わせているカップルに。

「んっ♡あっ♡ああんっ♡おちんちんおつきくて気持ちいいのおっ……♡」  
ビーチベッドに仰向けになって寝そべる男性の下半身に跨り、胸がぶるんっ♡ぶるんっ♡と揺れるのも気にせず、髪を振り乱しながら腰を上下している女の子。

「おおっ♡手え柔らけ♡あっ♡そこそこ♡カリントコもっ♡とシコシコして♡おっふ♡裏筋も気持ちい♡」

「こっちも忘れんなよ♡おら、もっ♡と気合入れてちんぽしやぶれ♡っあ♡♡すっげえ吸い付き♡バキュームフェラたまんねえ♡」

「あ♡♡締まる締まる♡ははっ♡オネ♡サン、俺のチンコそんなに好きなの？ それじゃあ、いっぱいズコズコしてあげないとね♡」

そして、浮き輪を使って水面にぷかぷかと浮いている一人の女性の水着を剥ぎ取り、群がり、肉体を貪る若者たち……。

誰しもが恍惚の表情を浮かべながら、所構わず淫らな行為に夢中になっている異様な景色を前にして、私の顔はカァ……っとなにに熱くなった。

私も今から、こんな風に……？

なんて、期待とも不安ともわからない感情に息を乱していたら――。

——ちゅっ♡

「ひゃんっ♡」

突然、ちゅっ♡という世にも官能的な音が耳の中で木霊して、肩と心臓がびくっ♡と弾み上がった。

それが、耳の縁にマスターの薄い唇を落とされたせいで発生したリップ音なのだとわかったのは、程なくしてからのことだった。

「なにをしてほしい？」

マスターの柔らかく温かな吐息と、低くて艶やかな声が私の鼓膜を甘やかにくすぐ撫でる。

「どこをどんな風にイジ弄られるのが好き？　乳首？　クリトリス？　ああ、こんなところに来ちゃうぐらいだから、普通のプレイじゃ物足りないかな？　目隠しでもしてみる？　それとも、この水着を脱がせてから手足を縛り上げ

てみようか」

口調はいやに穏やかで落ち着き払っているのに、耳に送り込まれてくる言葉はひどく卑猥で乱暴で、その落差に私の脳はバグでも引き起こしてしまったのか、前頭葉がびくっ♡びくっ♡と忙しくヒクついていた。

なにより、マスターのちよつと掠れた声そのものが物凄く色っぽくて、すぐ耳元で囁かれるとこめかみがぞくぞく♡と痺れ上がっちゃう……♡

「あっ♡あぁっ……♡耳元で喋らないで……♡」

「……ああ、耳が弱いんだ」

そう呟くや否や、マスターは私の耳にかぷっ♡と噛みついてきた。

続けざまに、マスターは耳たぶや縁にちゅるちゅるっ♡と吸い付いたり、程よくぬめった舌を耳の穴につぽつぽ♡と出し入れしたりして、私を容赦なく責め立ててくる。

ぢゅっ♡ぢゆるるっ♡ちゅぽっ♡ちゅぽっ♡ちゅぽっ♡ちゅぽっ♡ちゅぽっ♡  
ぶっぷっぷっぷ……♡

「おおっ……♡あっ♡あぁっ……♡いやっ♡あ、頭、ヘン……っ♡おっ、  
お腹がヒクヒクして……♡んんっ♡あぁんっ……♡」

甘美的な感触と水音で耳を<sup>なぶ</sup>撫られる度に、頭蓋骨に守られているはずの脳  
みそがぱちっ♡ぱちっ♡と弾けて、お腹の下で眠っていた子宮がきゅうっ  
♡きゅうっ♡と縮まって、私は堪らず甲高い声を張り上げてしまった。

「……確か、〃反応が薄過ぎてつまらない〃って、暴言吐かれたとか言っ  
たっけ。ふふっ、元カレさんは、貴女のなにをどう見ていたんだらうね？  
ちよっと耳を可愛がっただけで、こんなに気持ち良さそうに喘いでるって  
いのに……」

耳元で軽やかに笑うマスターに現状をつらつらと並べ立てられて、私はは

たと気が付いた。

私、耳だけで感じてる……？

そんな、今までこんなことなかった。陰核クリトリスやGスポットといった性感帯を指や舌で撫でられたってなにも感じなくて、むしろ痛いぐらいだったのに……。

耳をちょっと弄もてあそばただけでこんな調子だなんて、このまま続けられたら、私、一体どうなっちゃうの……？

確かに、「めちゃくちやになってしまいたい」、なんていう破滅的で短絡的な考えでこのホテルまでやってきたけれど……こんなに感じてしまうなんて、いくらなんでも怖すぎる！

「まっ、マスター、待って……！ 私、やっぱり帰——……ああんっ♡」  
セックスを中止してもらおうべくマスターを顧みようとしたけど、急に胸を

下側からふにゅんっ♡と持ち上げられて、私はそこでびくんっ♡と肩を  
わなな戦慄かせてしまった。

「ここでやめていいの？ 貴女の身体は、もうすっかり出来上がってるみた  
いだけど」

その証拠を見せてやる、と言わんばかりに、マスターの左手がビキニのブ  
ラトップを躊躇なくずり降ろす。

途端、私の左乳房が、ぽろんっ♡と転まろび出てきて、夏夜の外気に晒され  
た。

「あっ♡ やっ♡ いやっ……♡ 見ないで、見ちやだめえっ……♡」

公衆の場で——ここがいかにかに性交渉をするために作られた場所とはいえ——  
プレイベートゾーンを露わにしているという羞恥が、全身の血を沸き立た  
せていく。

だけど、恥部を隠そうにも、マスターの四肢にがちり拘束されている私にはどうしようもなかった。

そんな、マスターの腕も脚も、見た目は決して太いってわけでもないのに、  
どうして振り解けないの……！  
ほど

「ほらね。乳首がもうこんなに勃っちゃってる」

マスターは尚も私の耳をれるる♡と舐め回しながら、乳輪に長い長い指の先を添えて、その外周をス——……っ♡ス——……っ♡となぞり始めた。すっかり勃ちきってしまった、頂きにある乳首だけをわざと避けるみたいに……。

それがかえって乳首に血流が集まってくるように感じられて、私の息は上がっていく一方だった。

「はっ、はっ……♡ま、マスター、それやめてえ……♡」



「すごいね。直接触ってるわけでもないのに、どんどん色づいて、膨らんで、びくびくびくびく震えてて……」

マスターが低く囁くのにつれて、指先がゆっくりゆっくり、乳輪の内側に迫ってくる。

そして、ついに。

「——えっちだね」

「はおおおっ……♡」

私は、マスターの声に鼓膜を犯され、色気そのものみたいな指先に熟れ切った乳首をぷちゅっ♡と押し潰されて、あられもない嬌声を上げてしまった。

それがなにかの合図だったかのように、マスターの愛撫が一気に加速する。

先ほどにも増してねっとり♡と耳を吸われて舐め回されて、もう片方の耳は後頭部から回ってきたマスターのほっそりとした指にそっ♡と押さえ

られて……。

両耳を塞がれて行き場を失くしたぐちゅっ♡ぐちゅっ♡というイヤらしい水音が、頭の中でいつまでも消えずに、ずっと反響し続けている。

その音は、乳首をくにくに♡くにくに♡と捏ね繰り返すマスターの指と完全に連動していて……♡

まるで、どろどろに溶け出した熱い脳みそを、マスターの指で直接掻き混ぜられているみたい……♡

くちゅっ♡くちゅっ♡くちゅっ♡くちゅっ♡ちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽっ……♡くにくにくにくにくにくにくにくにくにくにくにくにくにくにく……♡♡♡

「あっ♡あああああ……♡♡まつ、マスター、ますたー……っ♡♡それだめっ♡それだめえっ……♡♡イッちやうッ♡♡イッちやううう

うっ……♡♡おねがいやめてえっ……♡♡」

前頭葉と子宮が、より一層強く甘く、きゅんきゅん♡と窄まりだして、私は恥も外聞もなく助けを乞うように鳴き喚いた。

だって、このまま耳と乳首を刺激され続けていたら、自分で自分を慰めていたときよりもずーっと強烈な性的絶頂オーガズムに呑み込まれるって、わかっちゃったから……♡

でも、マスターは妖しく笑うばかりで、一向に私を離してくれなかった。

「ふっ……何がダメなの？好きなだけイケばいいじゃないか。滅茶苦茶になりたいと言ったのは、他でもない貴女なんだから。ほら、いつまでもそうやって我慢してないで……イッて？ほら、ほら……俺に耳と乳首をぐちゃぐちゃに犯され尽くして……イケ」

「——おッッ♡♡♡」

びくんつつっ♡♡♡

耳にイヤらしすぎる命令を吹き込まれるのと同時に、乳首を咎めるようにきゅむっ♡と摘ままれて、私の脳はばちんっ♡というけたたましい音を立てて弾けてしまった。

脳みそを焼き尽くした快楽信号が神経を通じて背骨を下っていき、子宮の壁に何度となく跳ね返って、暴れ回ってる……♡

「あっ……♡♡頭ばちばちイッてるっ……♡♡おっ♡おおっ……♡♡おっくう……♡♡お腹の奥、びくびく止まらないっ……おあッ♡♡」

終わらない快感に浸食されている頭と腹部にばかり気を取られていると、まったく触れられていなかったはずの膣の入り口に電流が走り抜けて、視界が身体ごと上下に激しくブレた。

衝撃に導かれるがまま目線を下げると、マスターの手が私のビキニショー

ツに潜り込んでいた。

ううん、シヨーツどころじゃない。

マスターのしなやかな指が、陰唇の割れ目をくちゅっ♡くちゅっ♡と上へ下へと絶え間なく行き来して、時折思い出したかのように頂きにある私の陰核<sup>クリ</sup>を、くりゅくりゅっ♡て掘り返してる♡

そんな、まだ絶頂の波が引き切っていないのに、女の子の性感帯<sup>弱いところ</sup>をこんな重点的に責められたりしたら……♡

もう、気持ちいいのから戻って来られなくなっちゃう……っ♡♡

「あっ♡♡ ああっ♡♡ いやっっ♡♡ ま、マスター♡♡ ますたあつてばあっ……♡♡ おっ、おおっ♡♡ い、イッたばかりだからっ……♡♡ イッたばかりだから、そんなところコリコリしないでっ……♡♡ おねがいっ……♡♡♡んおっ♡♡♡」

「ふふっ……ごめんね。貴女があまりにもイイ声で啼くものだから、イジメ  
たくなってしまうて」

マスターが、頭を撫でるみたいに私のクリをよしよし♡って擦りながら、  
耳元で囁く。

「ほら、みんなも貴女をイジメたくて仕方がないみたいだ」  
そう指し示されて目に映ったのは、ナイトプールの光景。

未だ激しい情事を繰り広げている人たちもいるけれど——……そうではな  
い人、完全フリーとなっている男の人たちはみんな、まるで舐るねぶような目つ  
きで私を見つめていた。

誰も彼もがみんな、両脚の間からそそり立つ陰茎をシコシコ♡扱シゴきなが  
ら……♡

「……ね？ みんなこのぐちゅぐちゅに濡れたまんこにちんぽ突っ込みたく

て、あんなになっちゃったんだよ？ 貴女が、えっろいイキ姿を見せつけた

りするから……」

マスターがくつくつと笑うのに合わせて、ナニか硬いモノが私の尾骶骨びていこつを  
ごりっ♡ごりっ♡と、強したたかに擦こすり上げている。

——そのナニかが、他ならぬマスター自身の剛直なのだとわかったのは、  
劣情まみに塗れた声と熱い吐息で再び耳を掠められてからだった。

「……俺も、らしくなく興奮してる……♡」

「あっ♡あっ♡ますたあー……っ♡♡」

くりゅっ♡くりゅっ♡くりゅっ♡くりゅっ♡ごりゅっ♡ごりゅっ♡ご  
りゅっ♡ごりゅっ♡♡くりゅくりゅくりゅくりゅっ♡ごりゅごりゅごりゅ  
ごりゅんっ♡♡

ぱんぱん♡に膨クらんだ陰核リを根元からくりゅんくりゅんっ♡と穿ほじくり返す

指と、子宮と膣にまで振動が伝わるぐらい骨盤を揺る肉棒に挟まれた私は、快感に翻弄されたまま、ただただ目の前の光景を眺めていた。

このナイトプールにいるほとんどの男性が、私に欲情しているというこの光景を……。

……そうなの？ みんな、私を見て勃起しちゃったの？

——マスターも……？

「……俺のちんぽ、ここに挿れてもいい？」

マスターは念を押すのと一緒に、膣の中に指をぬろおっ……♡と挿し込んできた。

いとも容易く膣内へと侵入してきたその指は、肉壁を一粒一粒、丁寧丁寧にこそいで私を容赦なく追い詰めてくる。

「んんっ♡あっ♡あぁっ……♡マスター……♡マスターの指、すっごくえっ



ち…………♡おおんっ…………♡」

「…………ね、挿れていいでしょう？ 耳と乳首をイジられただけでグズグズになっちゃった貴女のとろとろまんこで、俺も気持ち良くなりたいんだ…………♡」  
マスターが、蜂蜜に角砂糖を溶かし込んだみたいな蠱惑的な声で懇願するものだから、私の意識は一気にそっちに傾いた。

指だけでもこんなに気持ちいいのに、いま背骨に押し付けられてるマスターの陰茎を…………おちんぽを挿れられたら、一体どれだけ気持ち良くなってしまおうんだろう…………♡

でも、このまま大勢の人たちの目に晒された状態でマスターとえっちするなんて、そんなの恥ずかしすぎる…………♡

「だ、だめえっ…………♡♡他の人に見られながらはいやなのおっ…………♡んっ…………♡」

私がなんとかそう訴えると、マスターはふっと笑いを零して、陰部からスツと指を引き抜いてくれた。

かと思いきや、私は上半身だけをバーカウンターの上に伏せさせられて……。

自ずと突き出す形となってしまうた私の臀部に、ナニか固いモノを——おちんぽをぺちん♡ぺちん♡と叩きつけられた。

そんな些細な刺激にさえ、私の肌はぞわぞわ♡と粟立ってしまう♡

「あっ♡あっ♡そ、そんなことしちやだめ……♡やあんっ……♡♡♡」

「ふふっ、柔らかい……♡ちよっとちんぽ打ち付けたぐらいで、こんなに撓<sup>たわ</sup>んじやって……♡さ、これでもう気がかりなことはないだろう？  
綺麗で可愛くて、ヤらしいお嬢さん……♡♡」

マスターが私を甘やかに揶揄しながら、ビキニのショーツをぐいつ♡と

横にずらす。

そうして露わとなった陰唇の肉ビラに、おちんぼの先端をぐちゅうつ♡と宛がわれて、私は全身に鳥肌を立たせながら首を反らせてしまった。

——前方には、酒瓶がいくつも並ぶ酒棚。後方には、膣からだらだら♡と垂れるえっちな蜜を亀頭で掬い上げながら、その入り口を擦り上げ続けているマスター……。

確かにこの立ち位置、この体勢なら、私の姿がマスター以外の人に見られることはないだろうけど……それでもやっぱり、恥ずかしいものは恥ずかしいっ……♡

「ま、待って……♡♡私まだ、心の準備が……♡♡」

「大丈夫♡心配しなくても、ゴムはちゃんとしてるから……♡」  
マスターは私の訴えをあっさりと撥ね付けると、腰をゆっくり、深く落と

して、おまんこの中におちんぽを真っ直ぐ、一直線に挿し込んだ。

にゅぶぷぷぷぷぷつ……♡♡♡

「はおおおおおおつ……♡♡」

膣の中で群生を成している粒々の褰が、男の人の熱い欲望にすべて余すことなく捲り上げられて、私の背がじわじわ♡と反り返っていく。

送り込まれてくる甘い甘い陶酔感で、脊椎が真っ直ぐに矯正されていくのをひしひしと感じる……♡

ま、マスターのおちんぽ、硬くて太<sup>ふつと</sup>おい……♡

それになにより、すっごく長い……♡♡元カレのじゃ絶対届かなかったところまで、ぐっぱり♡入り込んでる……♡♡

たった一突きで、おまんこの中みっちり♡満たされちゃった……♡♡

「はっ……♡狭<sup>せつま</sup>……♡」

マスターが情欲まみれの息を詰まらせると、ずっぽし♡ハマり込んだおちんぽがおまんこの中でゆるゆると前後しだした。

へこっ♡へこっ♡へこっ♡へこっ♡ぬぷっ♡ぬぷっ♡ぬぷっ♡ぬぷっ♡  
♡♡

「あっ♡あっ♡やっ♡やあんっ……♡ま、ますたーひどいっ……♡♡  
待ってって言ったのに……♡♡あっ♡あへっ♡あへっ♡う、動かないでっ♡♡  
♡♡パコパコやめてえっ……♡♡ああんっ……♡♡」

硬くて太くて長いおちんぽに、おまんこの襷をぞりっ♡ぞりっ♡てこそがれて、私の脳みそも一緒に焼け落ちていつてるみたい……♡

そうやって甘い焼き菓子みたいな快感に喘いでいると、上からマスターの笑い声が降り注いできた。

「ふふふっ……♡俺はこれっぽっちも動いてないよ♡自分で腰へコつかせ

てるの、わからない？」

マスターにそう突きつけられて、私は、自分が地に足付かないという不安定な状況でありながら、快楽を貪るため、必死に腰を振よじっていたことにハッと気が付いた。

「あっ♡ああっ……♡♡そんな、そんなっ、違うのおっ……♡♡私、わたし……♡♡あっ♡あっ♡あっ♡あおおお……っ♡♡」

そのどうしようもない事実に羞恥心を煽り立てられて、私の腰は余計に捻ねじれてくねる。

けれど、その艶めかしい動きも、マスターの大きな両手で腰をがっちり♡と掴まれてぴたりと止まってしまった。

「気持ち良くなってるどころ悪いんだけど……俺のちんぽ、まだ入り切っていないんだ♡だからこのキツキツまんこ、少し慣らさせてもらおうよ♡」

マスターは、そう言い切るか言い切らないかといったタイミングで、私の尻とおまんこに向かってぐっ♡と鼠<sup>そけいぶ</sup>径部を突き出しながら、腰をぐり♡ぐり♡と、ゆっくり旋回し始めた。

う、うそおっ……♡私のおまんこもお腹も、もうこんなにいっぱいなのに……♡マスターのおちんぽ、まだぜんぶ入ってないなんて……♡♡ぐりっ♡ぐりっ♡ぐりっ♡ぐりっ♡ぐりゅんぐりゅんぐりゅんぐりゅん♡ぐりりりりりりっ……♡♡

「おっ♡おんっ♡♡ぐりぐりやめへっ♡♡あッ♡♡そこっ♡♡そこだめ、そこだめえええっ……♡♡んん……ッ♡♡おほおおおっ……♡♡♡」

ぶくうっ♡と膨張した肉竿に、膣中のある一箇所をぐいっ♡と押し上げられた私は、目の中でばちばちっ♡と火花を散らしながら呆気なく甘イキをキめる。

そこがいわゆるGスポットであることはマスターもすぐに察したのか、グ  
ラインドを繰り返していた腰つきが明らかに別のものへと変化した。

私の弱点を重点的に突き、こそぐ、的確で容赦のない抽挿<sup>ピストン</sup>へと――。

こちゅっ♡こちゅっ♡こちゅっ♡こちゅっ♡ぞり♡ぞり♡ぞり♡ぞり♡ぞり♡  
♡どちゅどちゅどちゅどちゅ♡どちゅどちゅどちゅどちゅどちゅどちゅ……っ♡

「あっ♡あっ♡あぁっ♡そんな、やだっ♡やだぁっ……♡♡おっ♡お  
お……ッ♡♡んがあんっ♡♡あぁ――♡♡……っ♡♡」

何度も何度もGスポットを穿<sup>うが</sup>たれる度に、おまんこ全体に快感がじんわり  
♡広がっていった、骨盤と膝が勝手にカクカクカクッ♡て震えちゃってる  
……♡

「ん、あぁっ……♡まんこほぐれてきた……♡ふふっ、ヤダじゃないでしょ  
う？ イイところ擦<sup>こす</sup>られまくって、さっきよりも気持ち良くなってるくせ



に……♡嬉しそうに俺のちんぽもぐもぐしちゃって……♡もう少しで全部入りそ……♡んんっ……♡」

マスターが微かな唸り声を上げたその瞬間、おちんぽがGスポットをぎりっ♡と削り取りながら、おまんこの奥の方までずるっ♡と入り込んできて——……。

亀頭の先端がばちゅんっ♡と、おまんこの最奥部に深々と突き刺さった。「おひいんっ♡♡♡」

突き当たりの膣壁をぶちゅっ♡と押し潰されて、電流が私の頭の中をびりびりびりっ♡と焼き焦がしながら駆け抜けていく。

それがナニかのスイッチだったのか、おまんこの中で犇<sup>ひしめ</sup>く肉襞の数々が一気に活性化して、マスターのおちんぽに一斉に群がっていくのがわかった。

「うっ、くっ♡すっごい絡みつき……♡んっ、はあっ……♡ふふふふっ

……♡ お嬢さん？　もしかして、子宮口ポルチオを刺激されるは初めて？」

「ぼ、ぼるちお……？　おおっ♡♡ おうっ……♡♡ ぐうっ♡♡ おっ♡♡ おあっ

♡♡」

私が聞きなれない単語をそっくりそのまま口にすると、マスターはすかさず腰を細かく振って、膣の一番奥で震えてるしこりを、まるで杵でお餅を突くみたいにとちゅとちゅ♡ 搗ういてきた。

「そう、ポルチオ……♡ いま俺がちんぽで突いてる、子宮口近くのことだよ♡ クリトリスやGスポットなんかと一緒に、女の子の性感帯のひとつなんだけど……♡」

楽しげに説明してくれていたマスターの腰つきが、その子宮口におちんぽの先っぽを這わせたところで、ぴたりと止まる。

そうかと思いきや、マスターが身に纏っていたあの柑橘類のいい香りに、

鼻腔を擦られた。

「——ポルチオとGスポットの両方を交互にイジメられたら、とんでもなく滅茶苦茶になっちゃうと思わない…………？」

「ひッ…………♡♡♡」

ねっとり♡とした甘言を耳に吹き込まれた私は、口から悲鳴にも似た嬌声を漏らすのと同時に、お腹の奥底をきゅんきゅん♡と収縮させてしまった。

私のその変調を肯定と捉えたのか、マスターがゆっくり、ゆっくり、ず、ろ、ろ、ろ、ろ、ろおっ…………♡と、重くて太くて長い肉竿で、蜜甕をしっかりと揺り潰すみたいに腰を引いていく。

「あ、あ♡♡♡お、おお♡♡おおん…………♡♡ま、ますたあ…………♡♡それい♡♡♡い♡♡あああ…………♡♡おかしくな♡♡ちやう…………♡♡♡頭お

かしくなっちゃううううっ……♡♡」

ぷちゅんっ♡ぷちゅんっ♡て、襷の一粒一粒が潰れる度に私の頭の中も弾けトんで、ピンク色に染まっていつてる♡

私、このままじゃバカになっちゃうっ……♡

なのに、マスターは私の訴えなんかまるで耳に入っていないのか、淫褻を蹂躪しながらGスポットをも確実に<sup>なぶ</sup>騎り尽くして、それが終わったら、またかっこいいおちんぽを膣奥へと押し戻してきた♡

それで、とちゅんっ♡とポルチオを一突きして、そこを亀頭でぐりぐりぐりい……♡って撫で回したら、また腰を引いて、肉襷を挽きながらGスポットを捏ねて、もう一度おちんぽが奥まで届くように<sup>そけいぶ</sup>鼠径部をぐぐぐぐぐっ……♡と突き出して……♡

ぬろおおおっ……♡とちゅんッ♡ぬろおおおっ……♡とちゅんッ

……♡♡♡

「おおっ……♡♡おっ♡おっ♡おっ♡おんっ……♡♡ おおおおおお  
——♡……♡♡♡♡♡」

びくっ……♡♡びくっ……♡♡びくっ……♡♡びくん……っっ♡♡♡  
長大なおちんぽから繰り出される長い長いストロークに、おまんこの入り  
口から一番奥までじっくり♡と犯されて、緩やかな快感に晒され続けてい  
た私の全身は、ついに深イキを享受してしまった……♡

身体中がふわふわしてる気がする……♡それなのに、前頭葉も子宮も膣  
も、ぎゅっ♡ぎゅっ♡ぎゅっ♡て収縮を繰り返していて、気持ちいいの  
がちつとも止まってくれない♡

「……♡♡ちよっと、急にうねり過ぎっ……♡♡ん、おおっ……♡♡」  
どぷん♡♡♡♡♡どぷっ♡♡どぷっ♡♡びちゅっ♡♡びちゅっ♡♡

びちゅっ♡♡びちゅっ♡♡びちちちっ♡♡びゅっ♡♡びゆるるっ♡♡  
びゅ——っ♡♡びゅ——っ♡♡

艶めいた息を吐くのと同時に、マスターもぶるるっ♡と身体を震わせながら達した。

「ぐっ……♡やば、まだ出るッ……♡♡あ、くっ……♡」

おまんこの中で、マスターのおちんぽがどくっ♡どくっ♡て力強く脈打ちながら、ずーっと射精してる……♡マスター、おちんぽだけじゃなくて射精も長あい……♡

それがなんだか、マスターが私でいっぱい気持ち良くなってくれたという裏付けになっているような気がして、すごく嬉しい……♡

「……っはあ、はあ……♡ああ……♡まいったな……♡俺は、そんなに性欲がある方じゃないと思ってたのに……♡」

永遠にも思える長い長い射精がようやく終わった頃、マスターは独り言ごで、そして――。

マスターは、私の両手を後ろに引きながら、腰を思いっきり突き出してきた。

ぐぢゅうううううう………ツツツ♡♡♡

「おおおおおっ………♡♡♡ おお、おおっ………♡♡ おちんぽおっ………♡♡  
なんで、どうしてっ………♡♡ どうしてさっきより硬くなってるのおっ………♡♡」

つい今しがた射精したばかりにもかかわらず、硬度を一段と増したおちんぽに膣のより深いところまで入り込まれて、治まりかけていた性的絶頂オーガズムが否応なしに呼び戻される。

だけど、両手の手首を掴まれて身動きの取れない私には、どうやっても快

感を逃がすことができなくて……♡

引かれるままに振り返った私の鼻先には、妖しい逆光に理知的な瞳を異様にギラつかせるマスターの顔が待っていた。

「……ごめんね」

——どちゅんッッッ♡♡♡

「——おッッッ♡♡♡」

何に対する謝罪なのだろう、と、茹<sup>ゆ</sup>る頭でぼんやりと考えていたところに突然、重くて鈍い超ド級のピストンを<sup>ポルチオ</sup>子宮口に撃ち込まれて、陶醉感が私の脳天を一瞬にして突き破っていった。

それなのに、マスターが繁殖期を迎えた獣みたいに腰を振りたくるから、私は快感地獄の回廊に迷い込んだまま帰れない。

どちゅッ♡♡どちゅッ♡♡どちゅッ♡♡どちゅッ♡♡ゴッ♡♡ゴッ♡♡



♡ゴッ♡♡ゴヅッ♡♡♡♡♡

「んおおッ♡♡おっ♡♡おっ♡♡おっ♡♡おお……ッ♡♡ま、ましゆたあー……♡♡やめへっ♡♡あぐっ♡♡うぐっ♡♡あ——ッ♡♡♡♡♡」  
「っ、ああ……ッ♡♡気持ちいいっ……♡♡んっ、おおっ……♡♡♡♡ははっ……♡♡だめだよ？ そんな可愛い声で啼<sup>な</sup>きながら、俺のちんぽぎゅうぎゅう締め付けて、精子作るの促したりしたらさ……♡♡」

マスターは一心不乱におまんこと子宮口を穿ち続ける腰つきをそのままに、私の手首から両手を離してお腹に絡ませ、体をぐっ♡♡と自分の方へと引き寄せる。

私とマスターの身体がぴたっ♡♡と密着した、そのときだった。

「貴女のこと、孕ませたくなるだろう……？」

「ひぎゅッッ♡♡♡♡♡」

耳から送り込まれてきた、この世のものとは思えないぐらい壮絶な色気を纏った声に脳みそを破壊されて、私のおまんこはまるで歓喜するみたいにぎゅっ♡♡♡と締め上がり上がった。

「んっ、はあっ……♡♡あーもう、だからそんな必死になってちんぽに絡みついちやだめだって……♡♡エロすぎ……♡♡」

マスターはそうやって呻くけど、私の締め付けなんてもものともせずになお腰を激しく打ち付けてくる。

ぱんっ♡♡ぱんっ♡♡ぱんっ♡♡ぱんっ♡♡ばぢゅっ♡♡ばぢゅっ♡♡ばぢゅっ♡♡ばぢゅっ♡♡ばぢゅっ♡♡ばぢゅっ♡♡

「あ——っ♡♡あぁ——っ……♡♡もっ、だめっ♡♡♡♡イッちやうっ♡♡イッちやうううっ♡♡やだやだやだあっ……♡♡あッ♡♡♡♡イ

クイクっ♡♡ますたあ——♡♡……っ♡♡あお、イグう——♡♡ッッ♡♡」

びくッ♡♡びくッ♡♡びくッ♡♡びくッ♡♡びくびくびくびく——♡♡ッッ♡♡♡♡

子宮の入り口を挟じ開けんとする怒濤のピストンに、私は成す術もなく、光の速さで連れて行かれてしまった。

これまでの人生の中で、一度たりとも味わったことのなかった、天国よりも甘い絶頂へと……♡♡♡♡

そして間を置かずして、おまんこの中を占めるおちんぽがビキビキビキッ♡とまた硬度を増しながら膨張した。

「……ッ、お♡♡出る……ッ♡♡♡♡」

ビュ——ッッ♡♡♡♡ビュ——ッッ♡♡♡♡びゅッッ♡♡♡♡びゅるるる



かつて私を手酷く詰なった元カレを揶揄するように、マスターは二、三回ほど鼠径部そけいぶをぐりぐりっ♡と厭イヤらしげに旋回してお尻を押し潰してから、腰を引いた。

「あひんっ……♡♡」

おちんぽがおまんこからぐぽんっ♡て引き抜かれたときに、大きく張り出した肉傘のエラが、子宮口からGスポット、陰唇の出口、膣の至るところにぞりぞりっ♡と引っ搔かって、私はまたもや軽くアクメをキメてしまう♡

陰茎という頑強な楔を失った私は、力無くぐったり♡とカウンターの上に倒れ込んだ。

なのに、どういうわけか未だおまんこの中では大きな塊がぞりっ♡ぞりっ♡て這いずっていて、じんわり♡とした甘イキがずーっと続いている……♡

「んあぁっ……♡♡やぁんっ……♡♡ま、ますたー……♡♡ナニしてるの  
おっ……♡♡」

「ん？ あぁ……ふふふっ♡貴女がイケないんだよ？ 貴女のまんこが俺  
のちんぽにしつこく食いついてくるから、ゴムが持ってかれちゃって……♡」  
どうやらマスターは、おまんこの中に取り残されてしまったコンドームを  
くいっ♡くいっ♡と引っ張っていたようで、それがちゅぽんっ♡て卑猥な  
音を立てて抜けたのと同時に、私も「おぐっ♡」ってみっともない声を上げ  
ちゃった……♡

「うーわ、我ながらすごい量だな……♡ほら、貴女の欲しがりまんこが作っ  
たのに、ゴムの中に無駄撃ちさせられちゃった可哀そうな精子だよ♡」  
マスターの声と一緒に、ピンク色のスライムみたいなものが顔の真横にべ  
しゃっ♡と降ってきて、私は思わず肩をびくり♡と竦<sup>すく</sup>ませてしまった。

「へっ……？」

私の目と鼻の先でたぶん♡たぶん♡と揺れているこの不定形の物体は……多分、恐らく、マスターの射精を受け留めたコンドーム、なんだと思う。

それにしたって、異様な膨らみ具合だ。ちょっと小さめの水風船に、限界いっぱいまで水を入れましたと言わんばかりに、マスターの精子がパンパン♡に詰め込まれてる……♡

なんて、異形の使用済みコンドームに目を奪われていたら、おまんこの入り口……陰唇の肉ビラを左右にくば♡って割り拡げられる感触がして、私の太ももはまろやかに戦慄わなないた。

「ああんっ……♡♡」

「あらら……ちんぽなくなっただけなんだ♡まんこがまだ物欲しげにパク

パク動いてる……ヤラしい♡もっともっと滅茶苦茶になっちゃいたいって感じかな？ 俺も……まだ物足りないぐらいだよ♡」

その事実を知らしめるようにして、硬くもしなやかな肉の塊が——マスターの勃起しきったおちんぽが、ぐちよぐちよ♡に濡れそぼった陰唇の割れ目をぐちゅっ♡ぐちゅっ♡と擦り上げてきて、私はまたいとも簡単に感じてしまった。

「んうんっ……♡♡あっ♡あっ♡ますたあー、おちんぽ擦りつけちゃだめえっ……♡♡なんでえ……？ どうしてこんなにおちんぽ硬いのお……♡♡」

二回も射精してたのに♡コンドームがぷよんっ♡ぷよんっ♡て弾んじやうぐらい出してたのに♡まだこんなにガチガチだなんて……♡

マスター、見た目に反してタフというか——物凄く雄っぱい……♡♡



そんなことを、マスターの逞しすぎるおちんぽにお尻のお肉をぐにっ♡  
ぐにっ♡と揉み込まれながら考えていると、不意に腰をぐっ♡と掴まれた。  
「はあ……身体、熱……♡丁度いい、今度はプールに入って涼みながらシ  
ようか♡それで……他の人にもちんぽ突っ込んでもらうといいよ♡複数プ  
レイなんてどうしようもなく変態的で、きつとんでもなく滅茶苦茶になれ  
るだろうからね……♡」

——他の人にも……？

マスターに提示されたことを——大勢の男性たちに取り囲まれて、全身と  
いう全身を貪られながら誰のものともわからぬ陰茎で、膣や子宮を突かれて  
いる自分自身の様子を頭の中でありありと想像してしまって、私は無意識の  
内にぶるるるっ♡と震え上がってしまった。

不特定多数の人とセックスするなんて、やっぱり怖いしどうあったって受

け入れられることじゃないけど……それよりもなによりも、私は――。

「い、いやあ……♡♡♡ますたあ……っ♡マスターだけ……マスターだけが  
いいのおっ……♡♡」

私の発言は、なんだかの射ていなかったように思う。自分でも、なにを望んでこんなことを口走ったのか……よくわからない。

だけど、そんな判然としない私の意思を、マスターは正確に汲み取ってくれたようだった。

「……仰せのままに、お姫様」

理知的で野性的な瞳をふっと細め、柔らかに微笑むマスターの顔が、すぐ近くにある。

気が付けば私は、仰向けにひっくり返された勢いのまま、マスターに優しく抱き上げられていた。それこそ、お姫様抱っこをされるように。

私、それなりに体重ある方だと思っただけ……それを軽々と抱きかかえちゃうなんて、やっぱりマスター、男らしくてかっこいい……♡

周囲のネオンは相変わらずいやに眩しいけれど、私の目には、マスターの方が何倍にも光り輝いているように見える。

そうやって、マスターの綺麗な横顔にぽっ♡と見蕩れていたら、私はふかふかのベッドの上に、まるで大事な宝物を扱うみたいにそうっと、ゆっくり降ろされ、横たわらされた。

私はいつの間にやら、プールサイドの奥まったところにひっそりと設置されている、天蓋に覆われたキングサイズのベッドへと連れてこられていたらしい。

「これで満足かな？」

マスターが、自分の肩に私の片脚を掛けるようにして高く持ち上げ、足首



尿道口からは、ついさつき出しきつたはずの白濁とした精子の残りど、透明のガマン汁が混ざったえっちな液体がとろおっ……♡とろおっ……♡と垂れてきていて、しかも時折びくんっ♡びくんっ♡て、活きのいいお魚みたいに上下に跳ね回るものだから、私のおへそ周りにはマスターの欲望に穢されていく一方だった♡

あからさまなカリ高ちんぽだけど、決して肉竿の部分が細いというわけでもない。むしろ、元カレやここにいる他の男性陣よりも明らかに太くって、血管がいくつも浮き出てる……♡

にもかかわらず、目がいくのはやっぱりその全長。目測になっちゃうけど、二十センチなんて軽く超えてちゃってるんじゃないかってぐらいに長い……♡だから私の子宮口<sup>ポルチオ</sup>まで簡単に届いちちゃったんだ……♡

股間部分を寛げた黒いストラックスからぼろんっ♡てはみ出してる陰囊<sup>タマタマ</sup>も、

精子をあれだけドボドボ♡って放出するのも当然だよね、と納得せざるを得ないほど大きくて……♡

ほ、本当に、こんな立派なおちんぽがさっきまで私のおまんこの中に入ってたの……？

なんて、余りにも強大な存在おちんぽから目を離せずにいると——。

「ふふっ……♡聞くまでもなかったね♡そんな発情しきった目で俺のちんぽ見つめちゃって……♡」

マスターは、ひどく慣れた手つきでその雄おちんぽの肉槍ゴムにカバーを被せて、私に“あつ”と言う間も与えず、おまんこを貫いてしまった。

——ッパアアンツ♡♡♡

「はおおおおおお……っ♡♡♡」

たった一突きで、それもおまんこの最奥部まで思いつきり穿うがたれた衝撃で、

私の爪先と舌先が、天井に向かってピーン♡と引っ張られる♡

「っ、あぁっ……♡♡♡すっごいうねってる……♡♡♡ホントに、このドエロまんこは……♡♡♡はぁ……♡♡♡ちんぽ突っ込んだだけで悦び過ぎだよ……♡♡」

マスターも、ほんの一時<sup>いっとき</sup>おまんこの感触を楽しんでいたみたいだけど、一呼吸後には額にうっすらと汗を浮かべて、緩やかな<sup>ピストン</sup>抽挿を繰り返して始めた。

ぱちゅっ♡♡♡ぱちゅっ♡♡♡ぱちゅっ♡♡♡ぱちゅっ♡♡♡ぱちゅっ♡♡♡ぱちゅっ♡♡♡ぱちゅっ♡♡♡ぱちゅんっ♡♡♡

「あっ♡♡♡あっ♡♡♡あっ♡♡♡おおお……ッ♡♡♡おっ♡♡♡おちんぽっ♡♡♡おちんぽしゅごいいっ……♡♡♡うああんっ♡♡♡」

どうしよう、気持ちいい♡♡♡気持ちいいっ……♡♡♡♡♡

ついさつき、マスターのつよつよおちんぼの形をしつかりと認識しちゃったせいなのか、あのえぐい高さをしたカリにこれでもかってぐらいGスポットを擦<sup>こす</sup>られて、襞<sup>こじこじ</sup>の悉くを削り取られてるんだと思うと、余計に感じちゃう……っ♡♡

「んあっ♡ あんっ♡♡ あっ♡ ああああ……♡♡ ま、ましたあー♡♡  
ましたー、ましたああ……♡♡」

突き崩される度にトびそうになる意識を繋ぎ止めて欲しくて、私は必死にマスターを呼んだけど……。――。

私の縋りつくような甘ったるい声に応えてくれたのは、マスターじゃなかった。

「あー、やっぱり♡さっきのお姉さんだ♡ うわ、おっぱいめっちゃ揺れてる♡えっろ♡」



「なーんでマスターとえっちしてるのー？　ずるーい、俺たちも混ぜーて♡」

マスターのピストンに膣と脳を揺さぶられたまま、声のした方にぼんやりと顔を傾けてみると、そこには天蓋を捲り上げてこちらの様子を伺っている二人の男性がいた。

……あ、この人たち、さっき私に声をかけてきた、あの大学生の……。

と、記憶を遡っているうちに、若い青年二人はズカズカとベッドに上がり込んできて、私の両サイドを陣取ってしまった。

「うは♡お姉さんってば、顔とろつとろじゃん♡ホントえろすぎ♡マスターのちんこ、そんなに気持ちいいの？　俺も挿れていい？」

言うが早いのか、左側に座した青年が自身の水着をずり降ろして、ボロン♡と飛び出してきた勃起ちんぽの根元を掴む。

それに釣られるようにして、右側に位置する青年も、自分の水着の中からおちんぽをズルツ♡と取り出して、その先端を私に差し向けてきた。

「喘ぎ声ヤバく♡めっちゃちんに響く♡これって誘ってくれてるってことだよね♡うれしく、いっっぱい突いてあげるからね♡」

二人とも発情しきっているのか、頬を上気させて、息を乱して私を見下ろしてる……。♡

「えっ♡あっ♡や、やだあっ……♡♡見ないで、見ないでえっ……♡♡おちんぽ、おちんぽ挿れちゃだめなのお……♡♡んぐっ♡♡あっ♡あっ♡あっ♡あんっ♡♡おッ♡おちんぽおっ♡♡おちんぽちゅいいっ……♡♡おんっ……♡♡」

どちゅっ♡どちゅっ♡どちゅっ♡どちゅっ♡どちゅどちゅど  
ちゅどちゅっ♡♡どちゅどちゅどちゅどちゅッ♡♡♡

“いやだ”、って、拒否の意思を青年二人にきちんと伝えたいのに、マスターのおちんぽがそれを許してくれない♡

私はただただ、マスターの荒々しい抽挿<sup>ピストン</sup>を一身で受け止めて喘ぐだけ……



そんな私に代って、マスターが青年二人に抗議しようとしてくれたみたいなんだけど……。

「おい、お前ら……うぐっ♡♡」

マスターの制止は、青年たちに届く前に呆気なく途切れてしまった。

多分、私のおまんこが、思いがけずマスターのおちんぽをぎゅうっ♡て締め付けちゃったから……♡

「ひぐっ♡♡あっ♡♡あっ♡♡だめっ♡♡ちくびっ♡♡おまんこと一緒に乳首イジめちゃらめええええっ♡♡♡♡んおおっ♡♡♡」

私が仰向けに寝そべっても、ピンッ♡としっかり上向きに勃ち上がった二つの乳首が、それぞれ一つずつ、青年二人のおちんぽにぐちゅう♡と押し潰されていた。

しかも、二人は握り締めた硬いおちんぽを左右に小刻みに振って、乳首をこりっ♡こりっ♡て無遠慮に<sup>なぶ</sup>撻つてる♡

「あゝ♡こりっこりの乳首、裏筋に<sup>こす</sup>擦れてめっちゃ気持ちいいっ……♡おっぱいもすんげゝ柔らかくてサイコー……♡俺、お姉さんのこと好きになっちゃいそう♡」

「お姉さんも乳首気持ちいい？　もうほとんどアクメ顔しちゃってるもんね♡あっ♡すっご♡乳首カりに引っかかるんだけど♡勃たせすぎでしょ♡おっ♡おっ……♡」

こりゅこりゅこりゅこりゅっ♡こりゅこりゅこりゅこりゅっ♡

乳首から絶え間なく生み出される陶醉感が、血流に乗って私の身体中を蹂躪するように駆け巡って、前頭葉と子宮に集束していく。

「んひいいいい……っっっ♡♡♡」

強烈な快樂信号に脳を焼かれましたった私は、もう全身をびくんっ♡びくんっ♡て痙攣させることしかできない……♡

おまんこなんか、私の意思なんてまるで無視して、勝手にぐねぐね♡ぐねぐね♡ってイソギンチャクみたいになねりまくっちゃってる……♡♡

蜜爰がマスターのおちんぽにぴたぴた♡て貼り付いて、ぎゅ♡ぎゅ♡ぎゅ♡ぎゅ♡……♡♡て締め付けちゃってる……♡♡♡♡

「う、ぐお……ッッッ♡♡♡」

一際低く太い呻き声を上げたマスターは、両手で私の太ももをぎっちり♡と掴み、鼠<sup>そけいぶ</sup>径部を陰唇にぐちゅう……っ♡と密着させたところで、ピスト



全身の関節が、壊れた玩具みたいにガクガクガクッ♡て震えて止まらな  
い♡

脳みそも蒸発しちゃうんじゃないかってぐらい熱くて熱くて、おまんこな  
んかもう、これでもかってぐらいマスターのおちんぽにちゅっ♡ちゅっ♡  
て吸い付いて、精子を搾り取るみたいに限界一杯まで窄まってる……♡♡

そんな、おちんぽを搾り潰<sup>す</sup>してしまいそうなぐらい苛烈な締め付けを起こ  
しているおまんこなんか物ともせず、マスターはまさにラストスパートと言  
わんばかりの超弩級ピストンを繰り出していた。

どちゅっ♡♡どちゅっ♡♡どちゅっ♡♡どちゅっ♡♡どちゅどちゅどちゅ  
どちゅっ♡♡どちゅどちゅどちゅどちゅどちゅッッ♡♡

「あ——ッッ♡♡あ——ッッ♡♡イぐうううっ♡♡あっ♡♡あっ♡♡あっ♡  
に、イッてるのにまたイッちゃううううっ♡♡あっ♡♡あっ♡♡あっ♡

♡ あっ♡♡ 乳首こりこりもうやだあっ♡♡ まっ、ますたあーっ♡♡♡ たすけてっ♡♡ たしゆけてえ……っ♡♡♡」

おまんこをおちんぽで責め立てられているだけでもこんなにキツいの、乳首も相変わらずこりこり♡こりこり♡イジられっぱなしで、私はもう、気持ちいい以外のことはなんにもわからなくなっちゃってた……♡

「……っあ♡♡ イク……ッ♡♡ 出る……ッ♡♡♡」

あっ♡♡ マスターのおちんぽ、ぶくうっ♡♡て膨らんで、おまんこの中を圧迫してる♡

くる♡キちゃう♡マスターが射精したら、またゴムにいっぱい精子せいしが溜まって、子宮をぷちゅっ♡て押し潰されて、またイッちゃう♡♡♡

「イッ、く……ッッッ♡♡ ぐん……ッッ♡♡♡」

びゅぐッッ♡♡ びゅぐッッ♡♡ ドクンッ♡♡ ドクンッ♡♡ ドクッ♡♡ ド



クッ♡ドクッ♡ドクッ……♡びゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅッ♡♡  
びゅ——♡びゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅッ♡♡♡

マスターが唸り声を押し殺したのと同時に、おちんぽがどくっ♡どくっ♡と脈打ちながら思いつき爆ぜて、精子がとめどなくゴムに吐き出されていく。

それでやっぱり、膣と子宮は、マスターの未だ膨張しっぱなしのおちんぽと、精子を溜め込んだゴムでいっぱいになっちゃって、私は緩やかに昇天した♡

「あっ♡♡あっ……♡♡あへっ……♡♡♡はへっ……♡♡まつ、またあー……♡♡ますたー……♡♡♡」

目がぐりんっ♡て上向いたまま、元に戻らない♡腰もゆるゆる♡ゆるゆる♡って、ずっっっ動いちゃってる……♡♡

天蓋に囲われたベッドの上では、私とマスターの艶めかしい息遣いだけが静かに響いていた。

その僅かな静寂を、ついに我慢の限界を迎えたらしい青年ら二人が打ち破る。

「いやもう……♡乳首イジられたままイクとか、ドスケベにも程があるって……♡イキ顔えつろ……♡マスター！ マスター早くそこ代わって！」  
「おい、俺が先だって！ もうたまんねえ♡……♡めっちゃ興奮する♡ちんこ爆発しそう……♡お姉さん、次は俺がパコパコしてあげるからね♡」

あ……私、今度はこの子たちにおちんぽ挿れられちゃうの……？

「や、やらあ……らめえ……♡♡」

呂律がまともに回らなくなった口で、懸命にそう反発したけれど、私のぼんやりとした視界に映る青年たちは引き下がってくれそうになかった。

このまま意識混濁していたら、きっと成す術もなく色んな人といっしょになるんだろうな、と。

そんなことを、蕩け切った頭で考えていた、そのとき――。

不意に、抱き起こされる感覚がした。

「このお嬢さん、俺以外の男はお呼びじゃないんだってさ」

マスター……マスターの優しい声が、すぐ近くから聞こえる。

あれ、でも……誰かがベッドから降りて遠ざかっていく足音もする。

「や……やだ、やだあ……！ マスター、どこにも行かないで……」

私が譫言のように呟くと、全身が逞しい腕と胸にきゅっと包み込まれた。

「……大丈夫、俺はどこにも行かないよ」

マスターのその言葉を念押しするようにして、私のおでこにちゅっ♡と、なにか柔らかいものが押し当てられる。

瞬間、子宮がきゅんきゅんっ♡て反応して、おまんこの中に入りっぱなしになっていたおちんぽを締め付けたのがわかつちやった……♡

それでも、私の目はとろん♡と溶けたまま、戻らない。

「んっ……♡ふふっ♡まだ滅茶苦茶になり足りないんだ……♡本当にえっちだね……♡」

爽やかで清々しい、シトラスの匂いがする。マスターの、匂いが……。

「いいよ……♡貴女が望むなら、いくらでもシてあげる……♡今度は二人きり……邪魔が入らないようなところで、ね……♡」

鼓膜を甘く揺さぶるその声に、私はなおも膣をきゅう♡きゅう♡と収縮させながら、無意識のうちに頷いていた。